

(67)0610 「 真 の イン フォー ム ド ・ コ ン セ ン ト は
成 立 し な い 」 060715 締 め 切 り 060711 提 出

一 般 認 識 に な り つ つ あ る イン フォー ム ド ・ コ
ン セ ン ト

わ が 国 の 医 療 の 実 施 の 前 提 と し て 、 医 療 者
側 と 患 者 側 と の 間 に イン フォー ム ド ・ コ ン セ
ン ト が 交 わ さ れ る こ と が 必 要 で あ り 、 で き る
だ け 書 面 に 記 録 さ れ た 形 と す る こ と と さ れ て
い ま す 。 今日 で は 、 イン フォー ム ド ・ コ ン セ
ン ト の 必 要 性 は 、 厚 生 労 働 省 の 指 導 も あ っ て 、
か な り 一 般 的 な 認 識 に な っ て い る と 考 え ら れ
ま す 。 簡 単 に い え ば 、 検 査 ・ 治 療 な ど に つ い
て 医 師 ・ 看 護 師 な ど の 医 療 職 が 患 者 ・ 家 族 に
十 分 説 明 し 、 患 者 ・ 家 族 は そ の 内 容 を 理 解 し
た 上 で 同 意 す る と い う こ と で す 。 し か し 、 わ
た し は 必 要 な 状 況 に 置 か れ れ ば 、 勿 論 、 イン
フ ォー ム ド ・ コ ン セ ン ト を 得 る よ う に 努 力 は
し ま す が 、 形 式 的 に は 同 意 は 成 立 し て も 、 本
当 の 意 味 の 医 療 者 - 患 者 間 の 同 意 は 成 立 し 得

ないものと考えています。

医療者側と患者側の医療理解度の落差

それは、こんな理由からです。それ相応の経験を積んだ医師が中心になって説明する状況を考えてみます。医師には、医学生時代の教育中に得られた基礎的医学知識に始まり、医師になってからの臨床経験などによる蓄積した専門的医学知識と技能、それらに基づく判断力がある筈です。もちろん、医師によってそれらには量、質ともに差異はあるでしょう。当然のことながら、医師個人の悟性・人生経験・宗教的背景・社会的環境などによって判断の方向に少しずつ異なる傾向があると考えるのが自然です。一方、患者側には、特別な例を除いて医学知識、医学に対する理解・判断力は、医師より勝っていることはまぎないでしょう。しかし、医師以上の悟性・人生経験・宗教的背景・社会的環境などによる総合的判断力をもつ患者がいるかも知れま

せん。しかし、狭い意味での医学的ということに限っていえば、理解・判断力が勝ることは有り得ないと考えます。これを、医師の驕りという人がいるかもしれませんが、しかし、そういうのはむしろ偏見というべきだと考えます。医師であるわたしには、公平に判断できないといわれるかもしれませんが、理解力・判断力が同等とするのは、どうしても無理です。このような同等の判断力のない状況では、真の意味での同意が得られるとは考えられない、というのはわたしの論旨です。わたしは、これまで多くの医師や患者に、この話をしたとき、「それは変だ」といった人は、ただの1人もいませんでした。そんなことをいう医師に面とむかって反対をする人はいないといわれればそれまでです。

インフォームド・コンセントに対する医師と患者との意識の差

そうしたら、朝日新聞にインフォームド・

コンセントに対する医師と患者の意識の差に関する記事が出ていました（朝日新聞 2005 年夕刊 2 月 26 日 3 版 10 頁）。内容は、インフォームド・コンセントについてのアンケート調査の結果、医師の 88% は十分な説明をしたと考えているのに、患者の 75% は、何かよく説明の内容が分からず、医師におまかせしましたというのです。医師におまかせは、無条件に承認することと考えられますから、真の同意とはいえないでしょう。

朝日新聞ばかりではないと思いますが、こんな時、新聞はどう解釈するのかについては口をつぐむのです。勝手に推測すると、わたしと同じような解釈をした人が新聞社の中にもいたに違いないのです。しかし、それを明らかに口にすると、考えようによっては多くの読者の中にいる患者側の、ある意味での足らざる点を指摘することになるので、したくないことなのでしょう。

しかし、医療者側にも説明が十分でない可

能性があります。ここで、“十分”は、かなりいい加減なもので、医療者側と患者側とでは、認識に大きな差があることによって、片や十分、反対側は不十分と考える可能性があります。一般的に良識ある普通の医師は、手術などについては少なくとも1時間以上も時間をかけて説明をするでしょう。それも数回に及ぶことがあります。ときには、親せきがきたからとか、興味津々の見舞い客が来たから説明してほしいなどといわれることも、曜日にかかわらずあるのです。

このような実態からみるわが国のインフォームド・コンセントのもとに行われるのは、「納得のいく」「得心できる」医療で、それから先は、「先生によろしく願います」医療を受けることであると考えられます。100%理解し、同意している訳ではないがacceptableであるということです。結果が良ければO.K.で文句なし。良くなければ、「あんなに宜しく」といったのに、となります。限りなく不明瞭

で、禅問答の世界です。

専門用語の意味

説明の中に医学用語が入って理解しにくいこともあるでしょう。能力のある医師ほど、医学用語をそのまま使うことはなく、内容を一般的な言葉に置き換えて説明するはずですが。一時期、医学用語を使うことに否定的な見解がありました。しかし、言語一般にそうであり、とくに専門用語には、数語で表される意味以外に、背景に膨大な意味、すなわち暗喩を持っています。極端な例えかもしれませんが、一般の人が胃癌といったとき、単に胃の中に何か腫れ物ができたと考えるに留まるでしょう。しかし、医師が胃癌といった時、胃の中の部位・癌の大きさ・悪性度・治療法・予後などをすべて含み込んだ、多くの情報を引きつれたものに対する認識です。専門的な知識があればあるほど、付帯的情報量は多いはずですが。

インターネットの資料はゴミ

近ごろは、なんでもインターネットに載っているよというかも知れません。有用なものもあるようです。しかし、整理されていない、ただ膨大な記事・資料は、情報ではないのです。極端に言えば、ゴミ箱に入っているゴミと同じです。適切に整理された記事・資料が、十分に理解力のある人に読まれて初めて情報として意味がでてくるのです。時々、インターネットを覗いてみますが、その意味で、わたしにとっておよそ90%以上はゴミと考えています。

インフォームド・コンセントが必要なわけ

どうしてインフォームド・コンセントが要求されるのでしょうか。インフォームド・コンセントの取得は、1980年代に米国から入ってきた思想です。根本的には、基本的人権に発する患者の人間としての自立権を尊重する

思想があります。多民族，したがって多文明国家である米国においては，この場合は特に医療に対する理解・判断も多様で複雑であることから，訴訟にまで持ち込まれるいろいろな医療紛争を回避し，あるいは出来る限り簡単に解決しようとする考えがあります。多文明国家とはいいながら米国は基本的にはキリスト教国家ですから神と人間との間の契約に始まり，すべてのことを約束事と考え，それを守ろうとする社会秩序があります。医療も，医療者側と患者との間の同意（インフォームド・コンセント）を基本とする契約にしたがう行為と考えるのです。仮に不具合が起こっても，インフォームド・コンセント以内のものであれば，免責される根拠になるとするのです。

このようなインフォームド・コンセントを受け入れるわが国では，少し複雑な重層した思想的状況があります。表層には，欧米的思想を受け入れなければならないとする意識が

あるのですが、深層には未だに儒教的思想があって、状況に応じて恣意的にこれらが出たり入ったりするのです。インフォームド・コンセントの成立には、病名・病状の正確な告知が絶対必要な条件です。儒教的思想とは、江戸時代に確立された封建社会の社会的通念ですから、ときには父権主義的・縦割りの村（ムラ）・家（イエ）を重視することなどから自立権を認めないことも起こり得ます。

第二次世界大戦の敗戦後、当時東大総長であった南原繁が、上からの指令がなくなり無気力状態にあった日本人に、自立しようと呼びかけたのは、彼の思想背景にキリスト教文化があったからと考えられます。

「本当の病名は本人には言わないで」といわれることが、特に進行癌などの完治が難しい病状の場合にしばしば起きるのです。結果的に、本人にも、関係者にも、曖昧な気分が残ることになります。この曖昧さは、ときに日本人社会に特有とされるものですが、はっ

きりは言わないが本人になんとか納得してもらおう、あるいは、本人の気持ちを考えて（忖度）とする日本人的惻隱の情の発露でもあるのです。日本人社会における生活の知恵ともいえます。さらに事態を複雑にするのは、ときに、「本当のことを知りたくない権利」という自立権が顔を出すことです。実際に、癌の告知をしたので気落ちして死期が早まったとして家族に訴えられた医師がいるのです。こんなとき、アメリカの病院にはチャペルのチャプレンが「死の告知」に宗教的にフォローをし、引導を渡してくれることが知られています。

文化の違うところに制度だけを持ち込むのは、大昔から続くわが国の為政者の悪弊といえます。

挿絵：初秋のニュージーランド。湖畔に家があるような湖で、体長47cmのブラウトラウトを釣り上げました。わたしの経験では、ニ

ュージーランドは、日本は勿論、北米大陸・南太平洋・欧州より魚影が濃いところのようです。